

戦間期ドイツにおける世論研究の試み

——テンニース『世論批判』の再検討——

宮 武 実 知 子

はじめに

「世論を反映した政治」「世論に訴える」といった言い回しを新聞やテレビで見聞きしない日はない。現代の政治・経済は世論という概念抜きでは語れない。とりわけ、世論が問題となるのは今も政治的・社会的混乱の時である。歴史上、世論に関する研究の常に革命や戦争といった経験を経て発展を遂げてきた。

西洋語での、「公」あるいは「公的意見」にあたる概念の歴史は古く多様だが、「世論」という言葉が実際に使用されるようになったのは比較的新しい¹⁾。単なる観念としてではなく、実際の政治的影響力として世論が意識されるようになった事件がフランス革命であったため、早い時期からフランスでは群集心理への強い関心が生じ、群衆や公衆といった世論の担い手についての思索が巡らされた²⁾。現在でも、世論を議論する際には、こうしたフランス生まれの概念が前提される。

しかし、戦間期のドイツでも、群衆や公衆、世論といった概念を、固有の歴史や思想的背景から捉えようとする試みがなされていたことはもっと知られて良い。世論の圧倒的支持を受けた政権が誕生する前夜のドイツで、社会学者フェルディナント・テンニースは、ドイツで初めての体系的世論研究『世論批判 Kritik der öffentlichen Meinung』(1922)を刊行した。

彼は『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(1887)の著者として知られているが、そのほかの著作については現在ではあまり顧みられることがない。『世論批判』も、1981年に再版されるまで長く絶版になっており、600ページ近いその分厚さと、「個体状の世論」「液体状の世論」「気体状の世論」

¹⁾「公的な・公共的な」という意味を表す英語・フランス語の“public”は、その語源であるラテン語“publicus”からして、もともと「人民全体に関わる・共同の」といった意味が強い。それに対して、ドイツ語の“öffentlich”は、「一般の観察・注視・認知に向かって開かれた」という意味を本来の意味としているため、ロマン語の諸語に較べて、政治的・社会的側面をより強く持つと同時に、視覚的で知的な側面も持っている。ドイツ語の「公共性 Öffentlichkeit」は、18世紀に英語(publicity)とフランス語 (publicité)を模して造られた言葉ではあるが、それぞれの名詞は当然ながら、派生したものの形容詞の含意を受け継いでいる。さらに、英語やフランス語の「意見」(opinion)には、同意や意見の「共有感覚」があるが、ドイツ語の「意見」(Meinung)はギリシア語に起源をもち、政治的に不十分な判断という意味合いであった。ドイツ語の「公論 öffentliche Meinung」もまた、18世紀後半に“opinion publique”を模して造られ言葉であり、イギリスでもほぼ同時に“public opinion”という語が存在していたという[小出 1995]。

といった幾つかの用語のみが時に引用されるに過ぎない。

テンニースの世論研究があまり知られていない主な理由としては、まずナチ期のドイツ社会学の停滞があげられる。戦後世代の社会学者たちは、歴史・哲学的な戦前の社会学を流行遅れと見なした³⁾。さらに、テンニースが大学で講義することを好まなかったために、自身の思想を再解釈して語り伝えてくれる弟子が少なかったせいでもある。戦後、アメリカ型の経験的世論調査論が急速に発展した際にそれ以前の理論的世論研究との連続性が否定されたこと、英語訳がされなかったことも、原因であろう[Gollin & Gollin 1973:182]。

しかしながら、本書はドイツで最初に世論について体系的に論じた研究書であり、「世論についての著作のうち今日まで残っている最も包括的な分析の一つである」[Gollin 1973:181]と評価されている。彼は初め『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で示した図式に則って議論を展開しようとしたが、折しも第一次世界大戦に遭遇する。あらゆる戦争は、人間の倫理や理性に関する見方、死生観といった価値観を変化させてきたが、第一次世界大戦は、その未曾有の規模、メディアの戦争への影響力などから、近代的価値観の起点であったといっている⁴⁾。たびたびの中断を経て完成した『世論批

²⁾ 群衆と公衆の概念区別は世論という概念の重要な前提となる。

群衆をネガティブに捉えた思想の代表が、1895年にギュスターヴ・ル・ボンが著した『群衆心理』であろう。その中で群衆は、衝動的で暗示を受けやすく、誇張的な感情を持つものとして描かれ、「個人の意識的な行為にとどまらなかった群衆の無意識的な行為が、現代の特徴の一つをなしている」[Le Bon 1895:訳3頁]とされる。そして創造性がなく、単に破壊力しか持っていない「群衆が支配するときには、必ず混乱の相を呈する」[Le Bon 1895:訳19頁]と非難する。彼らは論理的思想によってではなく、心象によって動かされるとされる。ル・ボンのこの著作はその後の現実の政治に対し大きな影響を与えた。ヒトラー、ムッソリーニ、T. ルーズヴェルト、レーニンといった、カリスマ的支配力を発揮したと言われる指導者らは、多かれ少なかれル・ボンのこの著作に影響を受けている[藤竹 1990]。

これに対し、ガブリエル・タルドは1901年の『世論と群衆』で、ル・ボンの「群衆の時代」として現代を捉える説には賛同できないとして、「現代は公衆の、もしくは公衆たちの時代である」[Tarde 1901:訳21頁]とする。タルドによれば、群衆と公衆とは混同されてはならない別物である。群衆はあらゆる時代に存在した集団であり、その性質はル・ボンが描写した群衆像とほとんど同じであるのに対し、公衆とは、印刷物、特に新聞に代表されるマス・メディアを媒介として生み出された近代の産物である。そして、公衆の行動は群衆の行動よりも知的で視野が広く、従ってより生産的であるから、「すべての集団が公衆へ変形するにつれて、世界は知的になる」[Tarde 1901:訳46頁]という。

また、タルドによれば、世論とは、「目下起っている諸問題に答えるために生じ、おなじ国、おなじ時代、おなじ社会の人間たちのあいだでたくさんの部数転写されている判断 judgements が、一時的に、また多少とも論理的に寄り集ったものである」[Tarde 1901:訳75頁]とされる。個人の意見が「世論」へと変わって行くのは「新聞」と「私的な会話」によってであり、ジャーナリズムの仕事は「公衆精神をしだいに国民化し、さらになお国際化すること」[Tarde 1901:訳83頁]である。新聞によって無限に拡大できる公衆は「最後に形成されながら、しかも民主主義の文明の進展につれてもっとも発展の途につくだろう社会集団」[Tarde 1901:訳31頁]なのである。しかしながら、タルドは公衆の判断力を全面的に信頼しているというわけではない。集団が人類の進歩に貢献するのではなく、すべての実り豊かな自発性は独立的で強力な個人的思索から発する。主に新聞によって結びついている公衆は、たやすく新聞、すなわちジャーナリストによって操作されてしまう。それゆえ、公衆たちが担う「世論」は必ずしも「理性的判断」というわけではないが、それでも「結局は理性の勝利に終る」とされている[Tarde 1901:訳73頁]。

³⁾ 戦後ドイツ社会学を代表する学者の一人である、フォン・ヴィーゼは、テンニースの生誕100年特集号の誌上で、「世論批判」は長々しく冗長で今日ほとんど読まれることのない書物になってしまったと書いている[von Wiese 1955]。

判』は、ほぼ同時代経験として記憶に新しい戦争と世論との関係について、自らの理論の応用として考察しようとしている。この戦争と世論に関する部分に焦点が当てられることは今ではほとんどない。しかし、当時の学会に大きな影響力を持っていた社会学者の同時代観察としても、その後の歴史的展開を考える上でも、意義深いものであるといえよう。

以下では、まず彼の名著である『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』における世論概念の位置づけを確認した上で、『世論批判』という書物の構成と世論概念の細分化の試みについて説明する。そして、同時代経験としての戦争と世論について取り扱った部分をやや詳しく紹介し、そこに見える彼の現実洞察と、社会展望の性質を明らかにしたい。最後に、彼の世論という概念の批判的検討とともに、その有効性を提示したい。

1. 学者共和国の世論：『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』

『世論批判』で展開される世論概念の理解のために、まず『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』における世論の概念の位置を確認しておきたい。

『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の議論は図式的な概念区分に基づいて展開される。テニースは最初に、人間の意志を本質意志(Wesenwille)と選択意志(Kürwille)とに区分する。本質意志は実在的・自然的な意志であり、選択意志は観念的・作為的な意志である。そして、この意志の二典型に対応して、社会は実在的・有機的生活としてのゲマインシャフト(Gemeinschaft)と、観念的・機械的構成体としてのゲゼルシャフト(Gesellschaft)とに区別される。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトは、分極的に対立する二つの根本概念であるが、このほかに、植物的（または有機的）、動物的、人間的（または精神的）とよばれる生命発展の三段階を示す概念がある。彼は、この生命発展の三段階を類型的に把握し、この類型を単に個人意志ばかりでなく、広く社会意志や社会集団の発展過程にも適用して、これらを一つの発展として段階的に捉えた。したがって、まず大きくゲマインシャフトとゲゼルシャフトとが二分され、次に両者がそれぞれ植物的、動物的、人間的の三段階に分けられて、合計六つの範疇ができるわけである。そして、個人意志、社会意志、社会集団の各領域が、これらの六つの範疇にしたがって分類され組織だてられている。

大まかな性質としては、ゲマインシャフトとは、本来的あるいは自然的状態としての人々の意志の完全な統一であり、本質意志によって結合された、それ自身実在的・有機的な生命体と考えられるものである。人々はそこでは、経験的には分離しているが、あらゆる分離にもかかわらず本質的には結

⁴モードリス・エクスタインズ『春の祭典』は、第一次大戦を軸に近代世界が大きく変化した様子を描いている。また、George L. Mosse, 1990, *Fallen Soldiers; Reshaping the Memory of the World Wars.* によれば、第一次世界大戦による空前の大量死という経験が、続く戦間期における戦死者の英霊としての崇拜を生じさせた。ヒトラーを初めとする後の政治的指導者たちは、死者の遺言執行人の装いを凝らすことで、その感情を自己正当化の手段に利用したのであった。

合し続けている。他方でゲゼルシャフトとは、選択意志によって結合された観念的・機械的な形成物である。ゲマインシャフトにおけるのとは逆に、人々はここでは、あらゆる結合にもかかわらず、依然として本質的に分離している。その結果ゲゼルシャフトにおいては、人々はそれぞれ一人ぼっちで自分以外の全ての人々に対しては緊張状態にあるとされる。

ここでは、以下の対応が確認できれば良い。この六つの概念的範疇のうち、ゲマインシャフトの人間の段階における社会意志 *soziale Willen* の形式は「信仰 *Glaube*」であり、その「道徳 *Moral*」となるのは「庶民階級 *Volk*」によって担われる「宗教 *Religion*」である。これに対応するゲゼルシャフトの人間の段階では、「開明 *Aufgeklärtheit*」された個人意志 *individuale Willen* の集合である社会意志は「理説 *Doktrin od. Lehrmeinung*」によって表され、その複合形式は「世論 *öffentliche Meinung*」とされる。そこでの生活は世界主義的生活であり、「世論は人間の全意識性によって設定される。世論の本来の主体は学者共和国(*die Gelehrten=Republik*)である」[Tönnies 1887:訳;下巻208頁]とされる。それゆえ、ここでの主なる職業は「学問 *Wissenschaft*」であり、「学問そのものの法則は教説 (*Lehrmeinung*)として与えられ、それによって学問の真理や見解が示され、それが書籍や印刷物となり、そうして世論になってゆくのである」[Tönnies 1887:訳;下巻209頁]。

つまり、彼は『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』執筆当時においては、世論を学者のような理性的人間によって形成され、印刷物によって媒介される、世界的な規模を持ちうる理性と考えていたことが分かる。「世論は盲目的な信仰にもとづいてではなく、自己の承認し採用せる理説の正当性に対する明らかな認識にもとづいて、普遍妥当的な規範を制定する要求をもっている。世論は、その傾向・形式から言って、啓発された科学的意見である」[Tönnies 1887:訳;下巻185頁]。それは、ゲマインシャフトにおける宗教と対応する位置にあることからしても、一種の道徳律でさえある。ここに描かれているのは、理性的ユートピアを支える原理としての世論であり、人間と社会の発展が最終的に行き着くべき理想状態の基盤なのである。

テンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』は、その発表直後から注目され評価を得たわけではなかった。1887年の初版刊行から実に25年を経て第2版が刊行され、そこで初めて評価されて1935年の第8版まで版を重ねた。特に第一次大戦後に広く読まれるようになったが、その意味において、ルネ・ケーニヒはこの本を1920年代のドイツ社会学における最も特徴的な書物と呼んでいる[König 1987:242]。1912年の再版以後に改めて当時の人々の心を捉えた背後には、近代の進歩と理性への信奉を支えられた啓蒙の思想が後退していき、懐疑とペシミズムに沈みゆく時代の空気があったといえる[秋元 1997:121]。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』が執筆された19世紀末から再版された20世紀初期にかけて、ドイツは急速な社会的経済的発展を遂げ、ヨーロッパ随一の軍事・産業大国にのし上がった。農村人口と都市人口は逆転し、産業の集中化、大企業化が進んだ。猛烈な発展の

スピードから生じる「国民の心理的方向感覚の喪失」[Eksteins 1989:訳104-5頁]が起きていたと言われる。社会自体が急速にゲマインシャフト的な環境からゲゼルシャフト的な環境へと展開しており、それゆえこの書物は、大規模な変化のまっただ中にいる人々に状況把握の用語を与えることができた。

しかし、ゲマインシャフトへの評価は、イデオロギー的な役割を付与されがちであった。それに対し、第8版の序文で晩年の彼は、「私は、50年前も今もこの書物のなかで倫理的あるいは政治的な意見書を提示しようという考えをもったことはないし、すでに第一版の序言において誤解を招きやすい解釈やもっともらしい応用をせぬようはっきりと注意を喚起しておいた」[Tönnies 1887(8. Aufl./1935): XLVII]と強調している。彼は決して「ゲマインシャフトへの回帰」を説いたこともゲマインシャフトの世界を賞賛したこともなかったとして、自身の理論に加えられた評価が自分の意図に反して展開されたかを主張しようとした。しかし、確かに彼の著作には、拭いきれない曖昧さと共に、無意識的なゲマインシャフトへの傾斜が読みとれる。「そこに政治的な含意を強くもつ解釈を引き込む結果となったところに、テンニースの理論が背負わなければならなかった皮肉な宿命があった」[秋元 1997:167]と言えよう。

2. 世論概念の細分化：『世論批判』

1907年、タルドの『世論と群衆』を読んだテンニースは、ドイツの学問的・社会的前提がフランスとはかけ離れていると考え、ドイツの事情に即した世論の研究書の執筆を構想した。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で示した宗教と対応する世論という図式をほぼ踏襲する計画であったが、他の研究活動や第一次大戦によって何度も中断されつつ1915年から21年にかけて執筆された。「人類の運命における恐るべき転換が、私が最初にその主題に取り掛かった当時と今日との間に起こった。世論の重要性は、実際に、そしてさらに、常に世論に加えられる評価において、著しく増大した」[Tönnies 1922:V]と序文でも述べられているように、世論の評価が大きく変化する政治的社会的な激動期と執筆時期は重なっている。

全体は3部構成になっている。第1部はいわば世論の社会学・理論編で、「世論の概念と理論」と題され、各基本概念の定義づけが行われる。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の図式を受け継ぐ形で宗教と世論の関係や、世論 öffentliche Meinung と大文字の輿論 die Öffentliche Meinungの区別⁹⁾が詳述される。第2部「経験的観察と応用」は、ゲゼルシャフト的環境の中での輿論に焦点が当てられており、「固体状」「液体状」「気体状」の輿論の分類や、米英仏独各国の歴史に即した輿論の性格が説明される。そして、第3部「輿論の特別な事例」では同時代経験としての、社会主義・社会民主主義と輿論の関係、さらに第一次世界大戦の状況と輿論との関係が詳しく記述され、最後に輿論の未来が展望されている。

テンニースは世論という概念のユニークな分類を提唱した。『世論批判』というタイトルからして、

「世論という言葉の使い方は吟味され精製されるべきであるということ、すなわち、明確な輪郭をもった意味において世論の概念を形造ろう」(S. VI)という意図に由来している。

まず彼は、「様々に相反する見方や願望や意図の集合体としての世論 öffentliche Meinung から、統一された力としての、すなわち共同の意志の表現としての輿論 die Öffentliche Meinung を区別すること」[Tönnies 1922:VI]を最重要視している。この区別自体はテンニースのオリジナルではない。はっきりとした形ではないにせよ、ルイ16世の財務長官ネッケルなどの著作で示唆されていた区別であるし、同じ1922年に『世論』を著したウォルター・リップマンも小文字／大文字の世論という概念を、世論の個人的・心理的側面と集会的・社会的側面として区別している。「人々の脳裏にあるもろもろのイメージ、つまり、頭の中に思い描く自分自身、他人、自分自身の要求、目的、関係のイメージが彼らの世論というわけである。人の集団によって、あるいは集団の名の下に活動する個人が頭の中に描くイメージを大文字の「世論」とする」[Lippman 1922:訳;上巻47頁]とされている⁹⁾。

端的に言えば、小文字の世論とは、今日の世論調査員が測定している対象であろう。世論が、例えば議会の討論のように曖昧さや矛盾も含めた意見の総体であるのに対して、輿論は裁判所の評決のように一致した判断であり、ある社会の価値観や信念と固く結びつくような形で表明されるものとされる。彼は輿論の合理的な側面を強調しようとした。教育があつて政治的影響力のある階層が形成する輿論という考え方は、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で示された世論とほとんど同じものである。しかしながら、世論からの輿論の区別は、都市環境の発展と中産階級の興隆という歴史的状況を反映させたものである。

さらにテンニースは、世論の「凝集状態」として固体・液体・気体というメタファーを用いた区別を提唱した。固体状の世論とは人々にとって不動の信念として表れる合理的世界観のようなもので、人間の自由という観念のほか、理性的であること、寛容、迷信の否定、といった道徳などをテンニースは例に挙げている。液状の世論は、固体状の世論よりは部分的な合意しか持たないが、日々移り変わる気体状の世論よりは確かなものへと凝固してゆく移行段階にある世論である。例としては、19世

⁹⁾本稿では、『世論批判』に限っては、小文字の öffentliche Meinung を世論、大文字の die Öffentliche Meinung を輿論と訳し分けた。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』ではこのような表記上の区別は行われておらず、全て小文字 öffentliche Meinung で表されているため、訳語も単に世論とした。

現在の日本語では、大文字・小文字の表記に相当するような概念的区別はないが、かつては「輿論」と「世論」が使い分けられていた。例えば、昭和5年発行の『総合ジャーナリズム講座第二巻』所収「輿論とジャーナリズム」の中で喜多壯一郎は次のように説明している。「公衆の意識として個人がある媒介的手段を透して自己の採る判断と他の個人が抱持する判断との類似を暗示的作用によって共通に意識する」ものが「輿論」であり、「社会的認識の対象とならんとしつつあるもいまだ読者の共同関心の域にまで到達しない心理状態」が「輿論に対する世論であり評論であり会話の変型である」と区別している。ほぼ大文字／小文字の区別と輿論／世論が対応しているため、本稿では特別にこの使い分けを用いることにする。

¹⁰⁾テンニースは1927年にアメリカ社会学を紹介する文章の中で、リップマンの『世論』の評を書いている。彼は、世論形成に際してのステレオタイプの果たす役割に関しては、自分自身の理論を補足する重要な概念として高く評価しているが、公衆の概念については包括的すぎるとして批判している。

紀から20世紀にかけての戦人の地位をめぐる労働観、女性の役割、非行少年の扱い、立憲君主国の政治体制が挙げられている。さらに、気体状の世論とは、変化しやすく表面的な判断に陥りやすい性質をもっており、フランスのドレフュス事件が好例である。反体制的な気体状の意見が液化し、次第に凝固して輿論を形成しようとする……。あるいはその逆も生じる。このような物理的状態の比喻を使用することによって、世論の動的な側面と静的な側面や、社会変化の推移を描写することが可能になる。

また、輿論に関しては、「その主体は、本質的に、とりわけ政治的には、結合された全体性にほかならない」[Tönnies 1922:131]ため、それ自体が人々の生活を従わせる力を持つようになるという。この輿論の概念は『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で示された世論と宗教の特徴づけを継承している。社会意志の総体である宗教と輿論は、一方では依存し類似しつつ他方では矛盾し対立するような密接な関係にあるということである。このことを理論的厳密さを抜きにしても理解できるよう書いていると彼は述べているが、それは「国家生活における世論の意味と力の崩壊と再構築のただ中に我々はいる」[Tönnies 1922:VII]と考えられているからである。つまり現代的問題状況の解明が意図されているのである。ここで主に扱われるのは「政治的要件の裁判官」として機能する輿論であり、この応用で宗教との関係が明らかにされるべきだとされる。「宗教と同じく輿論は——それは私が断固として強調する点なのだが——内部へと結合する力、義務を負わせる意志であり、しばしば意見の異なる者に対して道徳的憤慨や不寛容として表明される拘束力のある意志である。この傾向を輿論も示すということ、輿論が自己認識において自覚したことは今までほとんどなかったし、しかもその野心や権力がこの点では未だほとんど抵抗にあってもいないので、おそらく自覚されないのだ」[Tönnies 1922:VII]。彼自身が言うように、当時ほとんど手つかずだった輿論のこの統合機能を指摘したことがこの書物の重要な貢献の一つであった。

以上のような概念区分を、彼は実際に同時代の現実分析のための道具立てに生かそうとしたのだ。

3. 第一次世界大戦と世論／輿論

「かつてなかったことだが、何十万もの人が、互いに同胞なんだという、平和なときにこそ感じるはずのものを感じていた。二百万人の都市、ほぼ五千万人の国がそのときに、自分たちは世界の歴史に参加しているのだと感じていたのだ。そんなときは二度と戻ってくるとも思えない。小さい小さい自分を、白熱した大集団に投じるように求められていると、ひとりひとりが感じたのだ。そこでは利己的な思惑はすべてぬぐい去られた。階級の、身分の、言葉の違いはことごとく押し寄せる同胞愛の感情によってそのときに押し流されてしまった。[中略] 個人個人が自己の昂揚を経験し、個人はもう昔のように孤独ではなく、集団に参入し、人民の一部

であり、彼の人格、それまで隠れていた人格は意味を与えられたのだ」[Zweig 1944:訳;329-30頁]。

第二次大戦の亡命先で前途悲観から自殺した小説家シュテファン・ツヴァイクが、「昨日の世界」からの転換点であった1914年8月のドラマチックな連帯感を経験した折りの素直な感想である。第一次大戦が、関連諸国の熱狂によって押し切られる形で開始されたことは、今日よく知られている。おそらくツヴァイクの感覚は、当時の人々に共通の感覚であったろう。街頭の公共性⁷⁾によって参戦が決定された訳だが、この時の陶酔感は後の悲劇を知った後でも甘美な経験であったと回想されることが多いという⁸⁾。

しかし、この感情的な参戦決定と、初めての総力戦を戦う上での数々の情報戦、そして革命による終戦という一連の過程は、当時の学者や知識人に世論の機能を考え直させる契機となった。社会学者としてのテンニースはどのように同時代を見聞していたのか。以下では、世論と輿論の詳細な概念区分を現実分析に応用しようとした彼の分析を、世紀転換期から敗戦後のワイマール体制始動までの時間の流れに沿って追っていきたい。

大戦前のドイツの輿論は、戦争の規模と悲惨さを予想しつつも、それが現実になるという危機感を欠いていた、とテンニースは評価する。ドイツの急成長が近隣諸国の嫉妬を引き起こしたと輿論は認識しており、それゆえ諸外国の攻撃抑止のために軍備増強を歓迎していた。オーストリア側は強力な陸軍を持つドイツ帝国の後ろ盾を当てにしていたのに対して、ドイツ側はオーストリアを信頼すべき盟邦だが強国ではなく、戦争が始まれば二正面戦争は避けられないと理解していた。1913年4月に行われた時の帝国宰相の長い演説では、戦争が未曾有の大規模になり得るがゆえ軽率に事態の悪化を招くような行動をする政治家はいないが輿論の重圧が増大していることが警戒されている。「大臣がここで公然と新聞の『獣じみた』世論について言及するのは……」[Tönnies 1922:506]とテンニースが表現している点は注目に値する。小文字の世論とは「獣じみた」混乱を示すものであり、これが輿論と呼ばれる力に変換されていくのである。この新聞の影響力が、彼の世論／輿論に対する見方を変えざるを得なかった。武装加熱に浮かされた輿論は外交的な配慮を決断力の欠如と見なす、と嘆いた帝国宰相の回想記を引用したテンニースは、「すでに見たように、これこそまさに輿論の特徴である」[Tönnies 1922:506]と述べる。

当時の人々は自分たちの新聞の論調が争いを拡大することに無頓着だった。「大多数のドイツの一

⁷⁾ハーバーマスのいう公共性は、読書や討論といった理性的過程を経て成立するとされる。しかし、佐藤卓己の指摘するように、デモ行進や政治集会によって成立する公共性を無視することは不適当であるといえる。

⁸⁾Mosse, George L., 1990, *Fallen Soldiers; Reshaping the Memory of the World Wars*, Oxford University Press は、特に青年運動のメンバーによって、参戦と戦争初期の経験が美的表現で記録されたことの意味を検討している。

般民衆ばかりでなく、本来ならば輿論の担い手である知識人の大部分までもが、まるでそのようなことを考えていなかった。彼らは危険の大きさと近さを理解していなかったし、一般的な平和欲求を当てにしていたが、確かにその欲求は、実際のところ平和が不可欠であることにはなっていたのだ」[Tönnies 1922:507]。

輿論の感情的な政策は、特にイギリスとの関係で明らかになったと言われる。この世界的強国との良好な関係の模索がドイツ帝国にとっての死活問題であるという洞察が欠けていた。ビスマルクという殆ど無条件に信頼する指導者を失った輿論が方向感覚を喪失していたことが指摘される。輿論は不安と自信の間を揺れ動いていたが、1907年、あり得ないと思われていた英露協商が実現し、いよいよ状況は切迫する。「輿論は妥当性を欠いた不徹底な理解力しか持っておらず、それゆえ全く途方に暮れてしまった」[Tönnies 1922:509]。これが、ドイツが参戦へと流されていった過程であったとテンニースは見ている。

「通例、交戦状態にある国の世論は、戦争が自国に強制されたものであり、防衛戦争、またはイギリスの決まり文句のように、正当かつ不可避の戦争である、とする点で共通している」[Tönnies 1922:544]とテンニースは述べる。この小文字の世論には国民感情と輿論の両方が含まれている。国民感情は好戦的で、敵への憎悪や怒り、愛国的熱狂、幸運な結末や名誉ある勝利への期待といったものから成っている。そして、「このような危機的状況にある輿論はその本質を普段以上にはっきりと表明する。つまり、ある種の思考法や判断法を要求し、意見の異なる者に対して不寛容な、社会的な意志力としてである。宗教にとってと同様、世論にとっても疑いは罪となる——自国の強さに対する疑い、最終的な勝利に対する疑い、敵の非道と罪に対する疑い」[Tönnies 1922:544]。

戦時中の世論形成は政府や軍司令部の支配下にある。士気と国民感情の維持高揚のためには戦勝報告が最良の方法であるが、ともすれば現実の勝利を拡大し、現実の敗北を縮小し隠蔽しがちになる。そのような事実に対する不誠実さから、意識的な詐欺や嘘の決断への移行はたやすく生じる「あらゆる時代の戦争史とはそういったもので満たされている」[Tönnies 1922:545]。

輿論は迅速で完全な勝利を予期していたが、マルヌでの失敗でその期待は裏切られた⁹⁾。新聞の代表者は「我々は常に全てを知らせることはできないが、知らせることは本当のことだ」と述べたという。しかし実際には9月の大規模な退却についての報道も全くの虚構となってしまった。新聞の報道は信用に足るものではなくなってしまった。

当時、ドイツの政治的指導権を一手に掌握していたルーデンドルフ将軍は輿論の統御を自分の任務

⁹⁾Karl Lange, 1974, *Marneschlacht und deutsche Öffentlichkeit 1914-1939*, Bertelsmann Universitätsverlag は、マルヌの会戦における報道の嘘と世論の機能不全が、戦間期ドイツの戦争解釈を規定し、次の戦争へと導いたことを論証している。

と考えていたが、彼の採った政策は主に厳しい検閲制度であった¹⁰。1915年8月、戦時情報局が設立されたが、彼らの一連の計画はことごとく失敗する。ルーデンドルフ将軍は失敗の原因が勝利への意志の欠落にあると見なし、半官半民の新聞によって状況の打開をはかったが、この影響も限定的なものに過ぎなかった。1918年6月の終わりになってもなお政府は国内外の輿論を管轄するための「下準備」をしている始末だったという。そもそもそのような管理は、潜水艦戦の失敗や常態化した栄養不良による道徳の低下といった現実を前にしては、何の影響力も持ち得なかった、とテンニースは考える。

「参謀本部の指導者は明らかに、国民感情と輿論の違いを認識していなかった。彼らは国民感情に影響を及ぼそうとして、うまく輿論に到達できる場合もあったが、結局のところ輿論にはそのような働きかけなどあまり必要なかった。都市や地方の本来の群衆は新聞評論にほとんど影響されないし、国民感情は国民の健康や病気に基づいていて、本質的に健康状態を前提としている。せめてまずまずの平和に達するためには最後の活力を投入せねばならない、と輿論はよく知っていたが、この最後の活力は国民の蓄えからしか汲み出せず、ほとんど底をついていたも同然であった」[Tönnies 1922:549]。

同盟国の敗戦のニュースは国民を意気消沈させ、兵士や都市住民の疲労は革命に有利に作用した。にもかかわらず、政府の宣伝担当者は「戦争初期に持っていたような強い気持ちが必要だ」と説いており、テンニースは「熱意によって救いがあり得ると誤信する聖職者のよう」[Tönnies 1922:549]だと評している。

終戦以来、参戦国の（小文字の）世論はもちろん国民感情もまた動揺していた。安堵と被害の認識、絶望と無気力、日常生活に戻ることに對する不安が満ちており、当然ながら混乱は敗戦国の方が顕著であった。一方、輿論もまた激しく動揺しており、その原因は主に、未来の不確かさと、現在の不十分さ、そして違う可能性があったかのように思われる過去の美化によるものであったと言われる[Tönnies 1922:560]。

特にドイツは、敗戦の痛手に加えて革命による従来の国家的權威の失墜を経験して、輿論は機能麻痺状態に陥っていた。個人の平等と権利の意識とともに数々の改革が進行し、輿論はそれらを疑いながらも受け入れざるを得なかった。しかしやがて輿論は、ベルサイユ講和条約とサン・ジェルマン講

¹⁰第二次大戦時の日本軍部は、来たる総力戦に備えて、第一次大戦敗戦国ドイツの検閲・国内宣伝の失敗から、検閲の在り方や総力戦期の軍政運営を学ぼうとしていた。テンニースは、ドイツ軍最高統帥部諜報部長だったニコライ中佐の著作(Nicolai, W., *Nachrichtendienst, Presse und Volksstimmung im Weltkrieg*, Berlin 1920.)から、戦時中ドイツの検閲に関して多く引用しているが、この著作は日本陸軍参謀本部によって『世界戦争ニ於ケル情報勤務ト新聞ト輿論』として訳出されている。その後、内閣情報部が情報宣伝活動の手引きとして訳文を整え、1938年『大戦間獨逸の諜報及宣傳』と題して「部外秘」扱いの資料とした(津金澤聡廣・佐藤卓己・編、1994『内閣情報部・情報宣伝研究資料・第一巻』、柏書房、752-753頁)。

和条約によって再び大きな衝撃を受ける。輿論はその決定に反対し、押しつけられた条件、特に世界大戦に関する単独の罪を承認することを拒否しようとした¹¹⁾。経済的要因も加わって（小文字の）世論にはさらに混乱が生じる。「このひどい状態は社会民主主義、革命、新政府のせいには違いないという偏った弾劾は、初めのうち世論にはごく小さな基盤しか持たなかったが、組織的で絶え間なく強力な手段をもって傍若無人に活動するアジテーションによって、とりわけ反ユダヤ主義は相当な部分で足場を固め、この粗暴な方法が最も大成功を収め、どんどん広がり進んだのだった」[Tönnies 1922:562]。現在の不幸は現在の政府の責任であるという意識によって、輿論が政府や新しい国家形態に対して憤慨し、その改変への目論見すら生じる。

一方、社会問題に関する課題は、ドイツとオーストリアでは「社会化」のスローガンとともに登場した。輿論は一般にこれに対して懐疑的な態度をとっており、社会主義的労働システムの生産性を否定しているが、にもかかわらず、（小文字）世論においては社会主義的思想には抵抗が少なくなってきた。結局、ドイツの輿論は諦め半分希望半分で、「社会的」時代の到来と知的水準の高くなった「サラリーマン」の増加による国民の権利要求の主張などを承認せざるを得なくなったのだった。

「概して輿論は、重大な政治的倫理的な死活問題に関して慎重な判断が不完全にしかできない。たいていの場合、単に偉大な指導者 Führer の権威に従うことしかできないが、そのような指導者は最近では不運にもまれになってしまった」[Tönnies 1922:564]。国民教育の評価は高いが、かといって道徳の崩壊が妨げられるわけではない。当時は、世界観の危機という認識が一般的であったが、「それに関して特徴的なのは、さまざまな方面からはっきりと表明される新たな「ゲマインシャフト」への要請と、そして「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」の概念的対立がほとんど突然に一般の意識において変化し始めたという事実である」[Tönnies 1922:564]という。何世紀もの間に進行しつつあった宗教的危機はこのような時代には一層顕著なものとなり、輿論こそがこの危機に取り組む必要を迫られる、とテンニースは考えていた。

4. 代替宗教としての輿論の展望

「輿論の未来は文化の未来である」[Tönnies 1922:569]と宣言した上で、テンニースはまず、輿論と宗教との関係について考察する。輿論がその機能と影響力を拡大させる一方で、対照的にキリスト教は機能と影響力を減少させた。そして、「このキリスト教道徳の後退は国民生活においては悲劇的な出来事だった」[Tönnies 1922:571]。なぜなら、キリスト教の信仰とは魂の救済のみならず、真理の承

¹¹⁾マックス・ウェーバーも、ヴェルサイユ講和会議が始まった直後の1919年1月17日の『フランクフルター・ツァイトゥング』紙に「戦争責任」問題について」と題した論説を掲載している。この中でウェーバーは、ドイツの戦争責任を問う各国を激しく非難し、この問題に関して沈黙する自国の態度を「この上なく卑劣なもので、ドイツの歴史にもかつて例のなかったほどである」と糾弾している。（マックス・ウェーバー「戦争責任」問題について、『政治論集』、みすず書房、1982、539頁）

認を意味していたからだ。これまで抑圧されてきた階層の社会的重要性の増大によって、宗教的慣習の弛緩は促進される。彼らはわずかな知識しか持っていないが、重大な問題に関与したいという欲求は感じており、その欲求がますます強く輿論形成に作用する。「この〔下級階層の輿論形成への〕関与が有効に作用すればするほど、この点で輿論は政治的考慮による形成過程を喪失していくだろう」[Tönnies 1922:571-2]というテンニースの認識は、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』において示された、学者の担う世論という図式からの明らかな転換を示している。

この潮流が進展していく先に、テンニースは幾つかの可能性を考えていた。例えば、無神論的な意識が（小文字）世論に一般化し、事物の本質に関する説明原理を失った結果、輿論自体が宗教的なものになり得るということである。しかし、キリスト教の敬虔さを取り入れることができれば、輿論は人間性の改良を可能にするかもしれない、と彼は言う。

また、輿論の高揚は社会改革につながるが、この場合の社会改革は「社会主義」や「共産主義」ではなく「共同体 *Gemeinschaft*」概念として捉えるべきだとテンニースは考えていた。彼によれば、民族共同体 *Volksgemeinschaft* は大戦中、現実でもあり道徳的必要性でもあった。その核はイメージや理論の中ではなく、健全な家族生活という事実の中にあり、これこそが真の道徳の根源であるという。輿論がこの民族共同体という概念に結集すれば、輿論はいよいよ異なる世界観と党派を一つの目標へと団結させ得る力になるだろう、とテンニースは考える。そしてその結果、「宗教が常にそうであったように、輿論は社会的良心になるだろう。輿論は、倫理的内容で満たされ、これを浄化しようとする限りにおいて、それ自身が最終的な宗教になるのである」[Tönnies 1922:573]。

そのため必要となってくるのは新聞の改革である。「我々が輿論によって抱く考えは日刊新聞の存在と非常に密接に結びついているので、輿論の改革と未来は新聞の改革と未来から分離できないように思われる」[Tönnies 1922:574]。彼は、同じ1922年に出版されたばかりのドイツ新聞学の父カール・ビューヒャーの冊子『新聞改革の問題について』を紹介し、イエロー・ジャーナリズムから脱却した望ましい新聞のあり方を考察する。そして、「新聞内部からの自発的改革の必然性は、それ自身（小文字）世論として浮上りつつあるはずだし、それは輿論の自己教育のためには最も有効な手段かもしれない」[Tönnies 1922:575]という希望を述べて、この大著を締めくくる。

おわりに

状況分析の確かさに対して、未来展望の曖昧さは惜まれる。1914年の開戦に至る熱狂を実際に経験し、戦時中の情報統制やデマに関する認識を持ち、戦後の混乱の中にありながら、テンニースの未来への提言は抽象論の域を出ない。確かに彼は、輿論が適切で理性的な判断ではないということ、その形成は必ずしも教養のある者には限らないということ、その媒体となる新聞は誤った認識をも伝達

しうの危うい存在であるということを認識している。だが彼はその認識にも関わらず、あくまでもメディアの洗練と、それによって育まれる理性的な世論が大衆の判断の拠り所として機能するべきである、と単なる期待を表明するにとどまってしまった。しかも、社会構造の変動のただ中であっても、家族というゲマインシャフトに現状からの再生を託すという、いわば歴史を巻き戻す解決しか示せなかった。改革のため求めるのが、道徳であり倫理である点が、彼の世論／輿論に関する議論から拭えぬ曖昧な印象の理由であろう。この類の抽象的精神論が当時のドイツの社会状況に何の解決も救いももたらさなかったことは、その後の歴史が証明している。この後わずか十年あまりでドイツの世論は、自らを導いて精神的一体感を与えてくれる待望の「指導者Führer」を見出したのだから。

また、長すぎる著作は、語源にはじまり理論、思想史、現実の政治、と教科書的だが一貫性にはやや乏しく、その記述量に比して経験的研究にかんする目配りはほとんどされていない。戦後、実証型の世論研究が主流になる中では不利なスタイルであるし、第二次大戦という経験の後では流行遅れの観は否めない。

しかしながら、『世論批判』の有効性は評価されねばならない。

宗教と世論の相関関係、特に両者が共通して持つ規範的性質の強調は、現代の調査型世論研究と価値や社会統制といった社会意識論とを結びつける一つの手段を示している。ウェーバーの西欧の合理化学理論を世論という具体的な主題で展開したものとも言えるし、宗教に代わる規範としての世論という論点はリースマンの「他者志向性」やペラーの「市民宗教」のような社会的価値の議論として評価することもできる[Gollin&Gollin 1973:203]。現在、世論というテーマに関しては、実証研究と理論や歴史研究との乖離状況にあるが、それを媒介する理論研究は今後ますます必要になるはずである。

テンニースは、一貫して世論に対する関心を持ち続けた。第一次世界大戦を挟んで著された『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』と『世論批判』は、宗教と世論が類似した規範的機能を持つ点や、宗教に代わる倫理としての世論という考え方を共有している。しかし、世論／輿論に、いわば感情的で非合理的な性質を指摘した点で明らかな転換が認められ、社会状況を考慮に入れた思想的前進が見てとれる。35年を経た一人の社会学者の世論という主題への取り組みが、時代背景の推移も含めて表現されている例はほとんどないと言っていい。

世論の概念を理論的に細かく分類した上で、現実分析に応用するという、理論と時代診断を兼ね備える試みは野心的である。特に、戦争期の世論の理論的分析は困難で、ハーバーマスの『公共性の構造転換』の中でも扱われていない主題である。現在の実証型の世論研究が扱うことのできなくなった問題設定と長い射程を、『世論批判』は提示しているのだ。

文献

- 秋元律郎、1997『市民社会と社会学的思考の系譜』御茶の水書房
- Eksteins, Modris, 1989, *Rites of Spring: The Great War and the Birth of the Modern Age*. (1991、金利光訳『春の祭典—第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』TBSブリタニカ)
- 藤竹暁、1990『大衆政治の社会学』有斐閣
- Gollin, Gillian Lindt & Albert E. Gollin, 1973, "Tönnies on Public Opinion", in: Werner J. Cahnman, *Ferdinand Tönnies. A New Evaluation. Essays and Documents*, Leiden E. J. Brill, 1973
- Habermas, Jürgen, (1973)1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. (1994、細谷貞雄、山田正行訳『公共性の構造転換』未来社)
- 飯田哲也、1991『テンニース研究——現代社会学の源流』ミネルヴァ書房
- 喜多社一郎、1930『輿論とチャーナリズム』、『総合チャーナリズム講座』第二巻(内外社)
- 小出達夫、1995『歴史の基礎概念・公共性について〔翻訳と解題その1〕』【北海道大学教育学部紀要】第66号
- König, Rene, 1987, "Zur Soziologie der Zwanziger Jahre oder Epilog zu zwei Revolutionen, die niemals stattgefunden haben, und was daraus für unsere Gegenwart resultiert", in: ders., *Soziologie in Deutschland. Begründer, Verfechter, Verächter*, Carl Hanser Verlag/München-Wien, 1987
- Lange, Karl, 1974, *Marneschlacht und deutsche Öffentlichkeit 1914-1939*, Bertelsmann Universitätsverlag
- Le Bon, Gustave, 1895, *Psychologie des foules*. (1993、櫻井成夫訳『群衆心理』講談社学術文庫)
- Lippman, Walter, 1922, *Public Opinion*. (1987、掛川トミ子訳『世論』岩波文庫)
- Mosse, George L., 1990, *Fallen Soldiers; Reshaping the Memory of the World Wars*, Oxford University Press
- W. ニコライ/内閣情報部、1938『大戦間獨逸の謀報及宣傳』(1994、津金澤聡廣・佐藤卓己・編『内閣情報部・情報宣伝研究資料・第一巻』柏書房)
- 佐藤卓己、1992『大衆宣伝の神話——マルクスからヒトラーへのメディア史』弘文堂
- 新明正道、1970『ゲマインシャフト』恒星社厚生閣
- Sloterdijk, Peter, 1983, *Kritik der zynischen Vernunft*. (1996、高田珠樹訳『シニカル理性批判』ミネルヴァ書房)
- 鈴木幸尋、1991『いま、なぜテンニースか』、『社会学論叢』(日本大学社会学会)112号
- Tarde, Gabriel, 1901, *L'Opinion et la Foule*. (1964、稲葉三千男訳『世論と群衆』未来社)
- Tönnies, Ferdinand, 1887(8. Aufl./1935), *Gemeinschaft und Gesellschaft. Grundbegriffe der reinen Soziologie* (1957、杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念』岩波文庫)
- Tönnies, Ferdinand, (1922) 1981, *Kritik der Öffentlichen Meinung*, Scientia Verlag Aalen
- Tönnies, Ferdinand, 1926, "Der Begriff der Gemeinschaft", *Soziologische Studien und Kritiken*
- Tönnies, Ferdinand, 1927, "Amerikanische Soziologie", *Weltwirtschaftliches Archiv*, 26:2
- von Wiese, Leopold, 1955, "Erinnerungen an Ferdinand Tönnies", *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 7.
- マックス・ウェーバー、「「戦争責任」問題について」、マックス・ウェーバー/中村貞二・山田高生・脇圭平・嘉目克彦(1982)『政治論集』、みすず書房、1982
- Zweig, Stefan, 1944, *Die Welt von Gestern: Erinnerungen eines Europäers* (1973、原田義人訳『昨日の世界1』みすず書房)

(みやたけ みちこ・博士後期課程)

Reconsider of Tönnies's Criticism on Public Opinion

Michiko MIYATAKE

The purpose of this paper is to reconsider the concept of public opinion through *Kritik der öffentliche Meinung* (*Criticism on public opinion*) published in 1922 by Ferdinand Tönnies.

Although he is well known as the author of *Gemeinschaft und Gesellschaft* (*Community and Association*), his other books are not regarded anything important today. *Kritik* is sometimes referred to by scholars of mass communication, but the attractive points of the book are still unfamiliar and the citations tend to be highly fragmentary.

His concern about public opinion, which culminated in *Kritik*, was already initiated as early as 1887 when he wrote *GuG*. So I will begin with the role of public opinion to which he assigned in his theory of *GuG*.

Then I explain contents of *Kritik*, some concepts differentiating public opinion, and especially his thought about the relation between World War I and public opinion. It is very important to know how the scholar of those days thought about the relation. In conclusion I want to show the contribution and possibility involved in his theory in spite of any weaknesses.